
ボクの蘭（おんな）に手を出すな

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ボクの蘭おんなに手を出すな

【Nコード】

N7512C

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

ひよんなことから絵のモデルをやることになった蘭。そしてそれを狙う怪盗紳士…。そして次第に明らかになる事実とは？ そしてコナンは怪盗紳士の魔の手から蘭を守れるのか？ 「名探偵コナン」と「金田一少年の事件簿」のクロスオーバー小説です。

ボクの蘭（おんな）に手を出すな

プロローグ

皆さん初めまして。

私は……いや、今は名乗らないでおきましょう。
どうせ私の名前は皆さんも後で知ることになるのだしね。

さて、今回は私が最近遭遇した、ある事件についてお話しようかしら。

私はその子の事を知ったのはその子がモデルになった絵が展覧会に出品された時だった。

その画家の実力も確かに凄かったわ。私もちょっと絵にはうるさいんだけど、その私が見ても相当の実力を持っていると思われる画家だった。

でも、私はその絵の別のところに魅かれた。そのモデルの女の子に何か魅かれるものを感じた。

確かにその子はどこにでもいそうな女の子だった。
でも、私はなぜかその子に魅かれるものを感じた。

その女の子を見たとき、私が今回の仕事として、その画家の描いた「絵」とそのモデルの女の子を狙おうと思った。

別に私はその子を殺そうとかそういう事を考えてはいなかった。
私はその子の美しさが何であるのかただ知りたかっただけ。

その子を私の元に置いておきたかっただけ。
その位、その子は私が見てもとても綺麗で可愛い女の子だった。

でも、結局はその仕事は失敗に終わった。

まさか、「あの子」が私の邪魔をすると思わなかったから。

そして、何故私が「あの子」にあんな感情を持ったのかわからなかった。

ボクの蘭（おんな）に手を出すな

…そのくらい「あの子」は私にとっても大変厄介な相手だったことは間違いなかったのだから。

（第1話に続く）

第1話

その日、蘭が通っている帝丹高校の空手部が大会のためある体育館に行ったときのことだった。

「…ああ、君、ちょっといいかな？」

試合を終え、学校に帰るために控室を出てきたとき、蘭は一人の男に呼び止められた。

「…私に何の用でしょうか？」

「…僕はこういふ者だけどね」

と男が差し出した名刺には「画家 英栄二^{はなぶさ}」と書かれてあった。

「え？ あの、英画伯ですか？」

思わず聞き返す蘭。そう言えばこの前小五郎が見ていた雑誌に「話題の新進画家」と写真入で紹介されていたのを見た記憶があったが…。

「そう。実はね、君の試合を見ていたんだけど、僕も昔空手やってたことがあるからわかるんだけど、なかなかいい型をしているね」

「本当ですか？」

「うん。女の子にしてはよく出来ているよ。そこで君に話があるんだけどどね…。どうだろう、絵のモデルになってみる気はないかな？」

「絵のモデル…、ですか？」

その話を聞いた蘭は素っ頓狂な声をあげた。

「ここじゃなんだから、詳しい話をそこでしたいんだけどね」

そして男は蘭を喫茶店に誘った。

「…それで私をモデルに、ってどういうことなんですか？」

「うん。実はね、今僕は『スポーツシリーズ』と名づけて、その、女の子達がスポーツをしている姿を描いた連作を描いているところなんだ。バスケットとかバレーボールとか、テニスをしている、っていう女の子はすぐに見つかったんだけど、格闘技経験がある女の

子でなかなかこれ、って言うのがなかなか見つからなくてねえ。そんな時に今日、あの体育館で空手の大会がある、って言うから見に来ただけだね。そこで君を見た、と言うわけさ。さっきも言ったけれど、僕も空手の心得があったからわかるけれど、君は女の子にしているいい型をしているし動きもなかなかよかったからね。正にモデルにぴったりだ、って思ったんだ」

「でもその…、画家と言ったら…」

そう、蘭はどうしても引つかかることがあったのだ。

「…いや、その、君が考えているようなことは絶対ないって！ほら、ここに証拠だってあるから」

慌てて男がそう言っていると、バッグの中からアルバムを取り出す。

「…ほら、これが僕の描いた絵なんだ」

確かに男の差し出したアルバムの中の写真にはユニフォーム姿でポーズをとっている少女達がカンバスに何枚も描かれてあった。中にはほぼ完成に近い絵やまだ下書き程度の絵もあるようだが。中

見ると確かに今にも動き出しそうな感じの絵だった。

「…どうだろう？ 考えてくれないかな？」

「…でも…」

「大丈夫。ちゃんとモデル料は払うし、わからない点があったらちゃんと答えてあげるし、絵を描くのも君の都合に合わせてあげるし」

「…うーん…」

「…じゃあ、こうしよう。2、3日考えてみてよ。僕が連絡あげるから引き受けるにしろ断るにしろ、その時に答えてくれないかな」

そう言われると蘭も無碍に断る訳にも行かないので、考えてみるという、結局男の車に乗って学校まで送ってもらい、その日は帰宅した。

*

「…それ、本当？ 英栄二って言ったら、新進の画家として有名じゃない！」

翌日、帝丹高校。

ボクの蘭（おんな）に手を出すな

蘭は親友の鈴木園子に「実は昨日こういうことがあった」と名刺を見せ、ことの次第を話した。

「うん。実は今も半信半疑なんだけどね。近いうちに連絡よこす、って言ってるのよ」

「でも蘭、それって凄いことじゃない。あの英栄二が描く絵のモデルになれるのよ」

「…うん、でも…」

「何か心配なの？ …わかった。もしかして裸になるのが嫌だとか？」

「そそそ、そんなんじゃないわよ！」

「ふーん。じゃあ、あんた英画伯が裸になれ、って言ったらなるわけね」

「だ、誰がなるって言うの！」

「…だったらやってみたら？」

「え？」

「あの英画伯のモデルになれるなんて、こんな機会滅多にあるもんじゃないわよ。思い切ってやってみたら？ それになんかあったら蘭お得意の空手で叩きのめして逃げてくればいいじゃない」

「園子…」

*

「じゃあね、園子、バイバイ」

そして園子と別れた蘭は帰り道を急いだ。

そのとき、蘭の制服の胸ポケットに入れている携帯電話が着メロを鳴らした。

「…はい、毛利です」

「あ、蘭さん？」

あの男の声だった。

「…はい。はい。…わかりました。それでは明後日の日曜日ですね」

*

その夜。

「…本当なのか？ その話」

毛利探偵事務所。毛利小五郎が娘の蘭に聞いた。

「本当だってば。この通りちゃんど名刺も貰ったし、今日私のケータイに電話がかかってきたし」

そう言う蘭は一枚の名刺を小五郎の目の前に差し出した。

小五郎はじっとそれを見る。

「…それにしても本当なんだろうな。英栄二と言ったら今話題の新進の画家だぞ。そいつが本当に蘭をモデルにしたい、って言ってきたのかよ」

「だから何度も言ってるでしょ。本当の話だって。今日の電話だってあさつての休みに打ち合わせをしたいからアトリエに来てくれ、って言ってたし」

「…まさか、ヌードとかそういうモデルじゃねえだろうな」

「じよ、冗談言わないでよ！ そんな話だったらこっちから断っているわよ！」

その様子を江戸川コナンが傍らで見ている。

(…それにしても、本当の話なのかねえ…)

コナンもにわかにもその話が信じられなかった。英栄二と言ったら先日もある展覧会で入選を果たした新進の画家で、特に女性をモデルとした絵画（勿論小五郎が心配(?)しているような裸婦画も何枚か描いたことがあるようだ)が得意で、コナンも数回新聞やテレビで彼の絵を見たことがあるが、確かに見るものを惹きつける何かがあるのは確かだと思った。

そんな彼が蘭にモデルを依頼したとは…。

「…で、言いたいどうする気なんだ？」

「うん。とりあえず行くだけ行ってみようかと思ってるんだ」

「何だつて？」

「うん、色々考えてみたんだけど、こんな機会滅多にあるものじゃないし、やるにしろ断るにしろ、ちゃんと会って話したほうがいいと思うのよ」

「しかし、お前に身に何かあつたら…」

「大丈夫。お父さんの考えているようなことはさせないわよ」

*

そして日曜日。

そのビルの向かいに立っている喫茶店の中に小五郎とコナンの二人がいた。

蘭はああ言ったものの、どうしても蘭のことが心配で、様子を見ようという事でこっそりと蘭を尾行し、丁度ビルの前に喫茶店があったことから中に入ったのだ。

「…失礼します」

「やあ、蘭さん、いらっしやい」

ドアを開けると英栄二が蘭を出迎えた。

「よく引き受けてくれたね、ありがとう」

「いや、そのまだはつきりとは…」

「大丈夫だつて。君が来てくれた、つてことはモデルになる気が少しでもある、つてことだからさ。…ところで、例のモノは持ってきてくれたから？」

「…え、ええ、一応は」

そういうと蘭は普段着ている空手の道着を見せる。

「じゃあ、隣の部屋で着替えてきてよ」

*

「いらっしやいませ〜!!」

一人の少女が喫茶店に入ってきた。

「あ、園子ねーちゃん!!」

コナンが叫ぶ。そう、喫茶店に入ってきたのはまぎれもない園子

だった。

「あ、コナン君、おじさん！」

園子もコナンたちに気がついたようだ。

そしてコナンたちが座っていた席に来るとコナンの隣に座った。

「園子ねーちゃん、何でここに来たの？」

「そういうコナン君たちこそ、何でここにいるの？」

「いや、実はな……」

そういうと小五郎は自分たちがここに来た理由を話した。

「……そう……、実は私も同じ」

「同じ、って……？」

「蘭も私に相談してきたのよ。で、思い切ってやってみたら、って言ったんだけど、蘭のことが心配でさ。調べてみたら英栄二はこの近くにマンション借りてて、丁度アトリエに使っている事務所の近くに喫茶店がある、ってわかったから来てみたんだけど……。あ、コーヒーとストロベリーショートください」

そして注文を通した園子は再び小五郎たちと向かい合う。

「……そう言えば、園子ねーちゃん英栄二について調べた、って言うたよね？」

「うん、一応ね。英栄二って小さい頃から絵画に興味を覚えて、当然美大に入ってフランスのパリにも2年ほど留学経験があるらしいわ。で、そのパリに留学していた頃に描いた絵が注目されて以来、新進の画家として名前が知られるようになったらしいのよ。地に身（み）に中学の頃に空手をやっていたことがあつたらしいわよ」

「じゃあ、蘭に興味を覚えたのも……」

「おそらくね。蘭が話していたんだけど、彼は今『スポーツシリーズ』と銘打った一連のその、女の子がスポーツをしている姿を描いた連作を描いているらしいんだって」

「その話なら聞いたことがあるぞ。既に2、3枚は書き上げてたんじゃないのか？」

「らしいわね。彼のプロフィールにも『スポーツシリーズ』

を製作中』ってあったし。ただ…」

「ただ、どうしたの？」

「彼の経歴に一部不明な点があるらしいのよ」

「一部不明だつて？」

「うん。中学に空手をやっていて、とか美大卒でパリに留学経験があることは間違いないんだけど、そのパリでどんな生活をしていたかが詳しくわかってないらしいのよ」

「詳しくわかっていない？」

「うん。その彼がパリにいた2年間全くと言っていいほど連絡をよこさなかったんだつて。そのためかどうか知らないけれど、いろいろ噂が飛び交っているらしいわ」

「噂つて？」

「うん。何でもパリでホームレスになっていたとか、ヤバイ組織と付き合っていたとか、中にはそういった組織に頼まれてルノワールとかゴッホの贋作を描いて売り飛ばしていた、とか言われているのよ」

と、小五郎が、

「その話なら聞いたことがあるぞ。確かそいつがパリに居た時に贋作を描くことによつて技法が培われていって、丁度その頃に描いた独自の絵が注目されるきっかけとなった、とかいうヤツだろ？ もつともその、英とか言う画家は笑つて否定してたけどな」

「そ。だから、一部の画家の中には彼の事を余り快く思っていない人もいるんだつて」

「…ふうん…」

そういうとコナンは黙り込んでしまった。

（…蘭に何ごともなければいいけどな…）

*

アトリエ。

蘭が道着に着替えて出てくると英栄二は、

「…それじゃ、何でもいいから型をやってみてよ」

「え？ ……ここ、ここですか？」

そして蘭は言われるままに突きや蹴りと言った構えをする。

「…よし、そのまま！」

そして英栄二はカンバスになにやら描き始めた。

*

一方こちらは喫茶店の3人。

「…蘭、何やってるのかしら…」

ストロベリーショートケーキを口に運びながら園子が呟く。

「…もうあのビルに入ってから1時間近くなるな」

そう言つと小五郎は既にぬるくなったコーヒを一口すする。

「…もしかしたらモデルやってるんじゃないの？」

と、コナンが、

「本当？」

「うん。だつてもし話を断つたとしたらすぐに出てきているはずだし、ここ来る時に蘭ねーちゃん、空手の道着持って出て行ったもん。もしかしたら蘭ねーちゃん、引き受けることも考えていたんじゃないの？」

「となると、蘭引き受けるつもりだったのかなあ」

園子が言う。

「…だろうな。全くアイツもあんなこと言っていながら、結局はやるつもりだったのかな」

*

「…よし、じゃあ、今日はこのへんにしておこうか」

さすがにずっと同じままの姿勢でいると体のあちこちが疲れてくる。

蘭はホツとした様子で軽く体をほぐす。

「ほら、見てごらん」

そういつと英は蘭にカンバスを向ける。

「あ…」

思わず蘭は言葉を失ってしまった。

まだ、デッサンの段階だが、道着を着た蘭が型を取っている姿が鮮やかに描き出されていたのだ。今にも動き出しそうな躍動感あふれる絵だった。

「…それじゃあ、また今度都合のいい日を教えてよ。今日のモデル料もその時に渡すから」

「…どうもありがとうございました」

そっとうと蘭は深々と頭を下げる。

「こちらこそ」

*

「…あ、蘭ねーちゃんだ！」

コナンの言葉に向かいのビルを見る3人。

確かにビルの正面玄関に蘭の姿が見えてきたのだ。

「…どうやら今日は何事もなかったみたいだけど…」

園子が言う。と小五郎が、

「…ヤバイ、蘭に悟られたらまずい。急いで帰るぞ！」

そして三人は勘定を済ませるとあたふたと喫茶店を出て行った。

ただ、このとき喫茶店にいた小五郎も園子も、そしてコナンも気がついていなかった。

同じ喫茶店にいた一人の女性の目が鋭く光っていたのを。

（第2話に続く）

第2話

結局蘭はあの日から時々英の元に出かけ、絵のモデルを続けることになった。

そして蘭が絵のモデルを引き受けてからそろそろ2週間が過ぎようか、と言う頃だった。

毛利探偵事務所の下に1本の電話がかかってきて、蘭が出る。

「はい、毛利探偵事務所…。あ、英さんですか？」

その声にかと蘭のほうを見る小五郎とコナン。

「…やれやれ、また電話かよ。最近よくかかってくるな」

小五郎が半ばあきれたかのように言う。

「蘭ねーちゃんと言ったけど、絵のほうもそろそろ完成が近いんだって。それで色々と細かな打ち合わせしてるんじゃないの？」

「そういえば英栄二は一枚の絵を仕上げるのが早い、っていう話だな。蘭が言ってたんだが、なんでもヤツは今、蘭の他にも何人かの女子高生のモデルを使って例の『スポーツシリーズ』を一度に何枚も描いているらしいな」

「そういえばそんな事言ってたね。剣道だか何かのモデルが同じ帝丹高校の生徒だ、って知って蘭ねーちゃん驚いていたらしいよ」

「…まあ、蘭がそれで納得しているんだからオレたちがどうこういってもしかたないんだがな…」

そういつた事を話している間に電話が終わったようだった。

「…何の話をしてたんだ？」

小五郎が聞く。

「ん？ 今度はいつ来られるか、って。画伯って今何枚も平行作業で進めているからモデル同士がかち合わないようにスケジュールを調整しているんだって」

そう言えば確かに蘭自身が言っていたのだが、彼女がモデルに行

つたとしても実際に英の元にいるのは1時間位だという。時々是他の絵のモデルになる少女とも顔を合わせることがあり、何人かの他校生とも知り合いになったという。蘭の話によると、どちらかというところ「毛利小五郎の娘」というより「帝丹の空手部の主将」としての蘭を知っている子が多いらしい。

「…それにしてもそれだけの絵を仕上げる、って言うのはどういうことなんだろうな」

「近々個展を開く、って言うってたけど…」

「粗製乱造にならなければいいがな」

*

それから数日後。毛利探偵事務所に1通の手紙がやってきた。

差出人は英栄二。内容によると再来週開かれる個展で「スポーツシリーズ」の中から完成した絵を何枚か展示する。蘭さんがモデルをやった作品も展示するからギャラリーに見に来て欲しい、と言う内容だった。

「…ああ、あの絵出来たんだ…」

蘭が呟く。

「出来たのか？」

小五郎が聞く。

「うん。私もデッサンの段階や色塗りの段階で何回か見せてもらったけれど、本当によく出来ていたわ。お父さんやコナン君にも見てもらいたいわ。きつと驚くわよ」

*

それからさらに2週間後。

「個展が開かれると言うのならその、蘭がモデルと言う絵を見てみたい」と言った園子と探偵事務所の前で待ち合わせたコナンたち三人はその足で個展が開かれる、と言うギャラリーがあるビルに向かった。

「…確かこのあたりなんだけど…」

蘭が地図を見ながら言う。

「あ、蘭ねーちゃん、あそこじゃない？」

コナンが指を指した方向に何人も人が入っていくのが見えた。

近くまで行ってみると「英栄二個展」と言う立て看板が立っていた。

そして4人は中に入っていた。

*

その絵は一番目立つところにおいてあった。

「英栄二スポーツシリーズ第1弾」と銘打たれて展示されているその絵は何枚か並べて展示してあった。

「…あ、あつたあつた！」

蘭の言葉にその絵を見るコナンたち3人。

「わあ…」

思わずコナンも声を上げる。

『空手』とタイトルがつけられたそれは蘭が空手の型を取っている絵だったのだが、確かに絵の中の蘭は英がかなり蘭の特徴を掴んで描いており、絵の中の蘭が今にも動き出しそうな迫力さえ感じる。

「ほんとによく出来てるなあ…」

小五郎が感心したように言う。と、園子が

「…そうね、ここまでよく出来てるとは思わなかったわ。出来ればこの絵を買ってあたしの部屋に飾っておきたいな」

「ちよ、ちよつと園子！」

確かに鈴木財閥ならばここにある絵を全部買い取ることとも不可能ではないだろうが、大体英本人がこの絵を売るかどうかすらわからないであろう。

と、その時だった。

「…確かにどれもこれもよく出来ているわね」

と、近くで絵を眺めていた一人の女が小五郎たちに話しかけてき

た。

「あ、そ、そうですね」

と、その女性は蘭の顔と、壁に飾られた絵を見ると、

「…？ あなたもしかしたら…」

「え、ええ？ この絵のモデルを頼まれたんです」

「…そう、あなたがこの絵のモデルだったの」

「…失礼ですが、どちら様ですか？」

小五郎が話しかける。

「あ、ごめんなさいね。私は醍醐真紀。職業は…、まあ美術評論家、つて所かしら。あいにく名刺は切らしちゃってるの。ごめんなさい」

「評論家ですか…」

小五郎が言う。と、その女は小五郎のほうを見ると、

「…失礼ですが、お父様ですか？」

「あ、私こそ失礼。私はこの子の父親で毛利小五郎と申します」

「毛利…小五郎？」

醍醐真紀、と名乗った女の表情が一瞬曇ったように思えた。

「どうかなさいましたか？」

「い…いえ、なんでもありません。それよりも蘭さん、と言いましたっけ」

「え、ええ」

「あなたみたいな女の子が空手をやっているとはねえ。驚いたわ。

実はね、私もこの絵、気に入っているのよ。私は絵、っていうのは確かに画家の腕によるところもあるけれど、こういう人物画、っていうのはモデルも重要な要素だと思っのよ」

「…い、いや、それほどでも」

「まあ、とにかくあなたのようなモデルに巡り会えて英画伯も幸せでしょうね」

そういうと醍醐真紀は腕時計を見る。

「…あ、いけない。用を思い出したわ。それじゃ」

「…よかったわね、蘭。美術評論家にほめてもらって」
「だからそれほどでもない、って。あれは英画伯があたしのことを美化して描いているだけよ」

そして蘭たちが別の絵を見ようとしたときだった。

「コナン君、どうしたの？」

「え？ あ、な、なんでもないよ」

コナンは醍醐真紀、と名乗った女に何か引つかかるものを感じていたのだった。

何故か、と言われてもよくわからなかったが、何か彼女の目が普通でないものを感じていたのだ。

（…オレの思い過ぎだといいいんだけど…）

*

その翌日のことだった。

毛利探偵事務所に一本の電話が入ってきた。

「…はい、目暮警部殿。…はい、はい。…なんですとお？ わかりました。すぐそちらに向かいます」

そして電話を切る。

「どうしたの、お父さん？」

蘭が小五郎に聞く。

「…今日目暮警部から連絡があつて、英栄二がギャラリーに展示してある絵が一枚盗まれたらしいんだ」

「何ですって？」

「それで、蘭に来てほしいそうなんだ」

「私に？」

「ああ。詳しいことはギャラリーで話すと言っている」

*

ギャラリーの前に来るとすでに警察のパトカーが何台も止まっていた。

その中に目暮警部の姿を見つけた小五郎は、

「目暮警部、事件とは一体なんですか？」

「いや、詳しいことは後で話すが、その前に中森警部が君に用があるといっているよ」

「中森警部が？」

中森、といったら捜査二課の刑事であり、怪盗キッド関連の事件で何度か顔を合わせたことがあるが何でまたその中森警部が自分に用があるのか？

「あ、毛利さん、こちらです！」

ギャラリイの中から中森銀三警部が顔を出した。

「一体どうしたんですか？」

「…これを見てください」

中森警部が指を指す。

「…これは…」

そこにいた一同が絶句した。

確かに昨日まで『スポーツシリーズ』と銘打たれて展示してあった絵の中の一枚が忽然と消えうせていたのだ。

「今朝ギャラリイにやってきた英画伯から連絡があつて、昨夜ギャラリイを閉めた際には確かにあつた絵が無くなつていたそうです」
「…ということは」

「おそらく盗まれたのでありましょう。それでちょっと気になることがありまして」

「気になること？」

「英画伯によると絵が展示してあつた場所に、このカードが代わりに貼つてあつたそうですよ」

そういうと中森警部は一枚のカードを小五郎に差し出した。それには、

「英栄二画伯の『スポーツシリーズ』の内、一枚確かに頂きました
怪盗紳士」

と書かれてあった。

「…怪盗紳士？」

「…捜査二課が怪盗キッドや大江戸小僧とともに追っている怪盗の一人じゃよ」

傍らで小五郎たちの会話を聞いていた目暮警部の声がした。

「…そういえば名前は聞いたことがありますな。やつもまた神出鬼没の怪盗の一人なんでしょ？」

小五郎が言う。

「ああ。怪盗キッドが宝石専門に盗むのと同様に怪盗紳士も主に絵画を専門に盗んでいるそうじゃが…、実はそれに関連してちよつと気になることがあつてな」

「気になること？」

「蘭君、ちよつといいか？」

「え？ 私に、ですか？」

いきなり目暮警部に話しかけられた蘭は戸惑ったようだ。

「ああ、君に聞きたいことがあるんだ」

そしてその足で一同は警視庁に向かった。

警視庁の応接室。コナンを挟んで両隣に蘭と小五郎が座り、向かい側に目暮警部が座っていた。

「蘭君。君は英栄二の、あの絵のモデルになっていたようだね」

「…はい、確かに1ヶ月くらい前にそういう話があつてお引き受けしたんです。それから英画伯のところ时不时々出かけてモデルになってたんですが…」

「それで何かおかしなことはなかったかね？」

「おかしなことと言われても…。これと言ったことはなかったし、ちゃんとモデル料も貰いましたよ」

「それならばいいんだが…。確か英栄二は今『スポーツシリーズ』と銘打った連作を書いていて昨日から個展を開いていたそうだが。いや、ワシも先ほどそのギャラリーに行ったついでに君がモデルに

なった、という絵を拝見してきたよ。ワシは絵のことはよくわからんが、そのワシが見ても、君の特徴をよく掴んでおってよく出来た絵だった、と思うぞ」

「それで、どうかしたんですか？」

「その『スポーツシリーズ』というのは君の他にも何人かの女の子がモデルになっておるそうじゃな」

「ええ。画伯のアトリエで何人かのこと知り合いになったし、まだ未発表の絵も何枚かあるはずですよ」

「そうか…。いや、実はな、その中のモデルの女の子がひとり行方不明になってるそうだ」

「何ですって？」

「…どういことですか？」

小五郎も聞く。

「いや、今日、ご両親から搜索願が出たんだが…。行方不明になっているのは米花高校に通っている女生徒で水野祐希、という女の子だそうだ」

「水野…？ もしかしたら…」

「心当たりがあるのか？」

「いえ、2、3回顔を合わせただけですけど…。確かバスケットボールのモデルをやっていた女の子だったと思うんですが…」

「…そのとおりだ。彼女は米花高のバスケット部に所属しておって昨日、バスケット部の休日練習があつて、校門前で他の部員と別れた所までは証言が取れたんだが、その後の足取りがまったく掴めていないそうだ。ご両親が昨日一晩探したが見つからなくて今朝になって搜索願を出したんだが…」

「となると、事故か事件に巻き込まれ可能性があるとしても？」

小五郎が聞く。

「まだ断定は出来ないがな。一応警察としても両方の線で捜査しておるよ」

「それで、警部。その気になることというのは？」

「偶然かどうかわからぬが、その盗まれた絵というのが、彼女がモデルをやっていたバスケットボールの絵だったのだよ」

「…なんですとお？」

「いや、もちろん彼女の行方不明になっておる件と、今回の絵画盗難事件が偶然なのか、それとも何か意図的なものがあるのかどうかまだわからんが、とりあえず中森警部とは協力していつて何とか事件が早く解決するようにするつもりだ」

（…うーん…）

そんな彼らの会話を聞きながらコナンはさつきからずっと事件について考え続けていた。

（うーん…、絵画の盗難事件とその絵のモデルとなった女子高生の行方不明事件。一見関係なさそうな事件んだけどなんか偶然だとは思えないんだよなあ…）

確かに行方不明になった女子高生がモデルとなった絵が盗まれる、と言うのは偶然にしては出来過ぎてはいないだろうか？

（それにしても、怪盗紳士か。どこかで聞いたことがあるんだよなあ…）

よくは覚えていないがコナンは何か怪盗紳士、と言うのに聞き覚えがあったのだった。

（…ふうっ。後で調べてみるか）

*

そしてその日の夕方。

「…あれ、お父さん。コナン君どこいったのか知らない？」

蘭が小五郎に聞く。

「ん？ 何でも阿笠博士の家に行ってくる、晩飯までには戻ってくるから心配するな、と言ってたぞ」

「ふうん…」

コナン「新一がもともと住んでいた家は、阿笠博士の家の隣にあ

る。

コナンはその中のいる一室でさっきから調べ物をしていた。

コナンになってからこの家の管理は阿笠博士に頼んでいるが、時々こうして自分の家に戻っては父親である工藤優作が残した膨大な量の犯罪に関する資料から目的の情報を探し出すことをしていたのだった。

「怪盗紳士、怪盗紳士……と」

何冊めかのファイルを見ていたときだった。

「…これは…」

彼が探していた情報がそこには書いてあった。

「…やっぱりな。思ったとおりだ」

（第3話に続く）

第3話

翌日になっても行方不明になった女子生徒の行方はわからずじま
いだった。

誘拐の可能性が高い、ということ警察は報道協定に基づき、事
件が解決するまではつ報道を差し控える、ということもあって目
暮警部も捜査状況についてはさすがに小五郎たちにも教えることが
なかった。

ただ、目暮警部は「怪盗紳士」と言う名前が出てきた、というこ
とで、中森警部と協力して事件の解決に当たるということだけは小
五郎たちに教え、さらには蘭にも今回の事件に関してはもし何かわ
かったことがあったら教えて欲しい、と協力を要請するとともに蘭
にも十分に注意するように伝えた。

「…なんで私も気を付けなければいけないんですか？」

蘭が目暮警部に聞く。

「いや、まだ断定は出来かねるが、今回の行方不明事件がその『ス
ポーツシリーズ』に関係があるとしたら君も被害者になる可能性が
ある、ということだ」

「私が、ですか？」

「ああ、君もあの絵のモデルになっておるだろう？ もし今回の事
件が、その、怪盗紳士がモデルの女の子を誘拐した、としたら、第
2、第3の犯行を行うことは十分に考えられる。ということは蘭く
んが被害者になる可能性はゼロではない、ということだ」

それを聞いた蘭は黙ってしまった。

「…心配するな。勿論我々も事件を早く解決するつもりだ。だから
君は余計な心配をせずともいい」

「わかりました。気をつけます」

「それならいい。いいか、何か事件に関して思い当たることがあつ

「たらいいつでも連絡してくれよ」

「はい」

*

「それにしても、一体怪盗紳士、って何者なんだろう…」

蘭がつぶやくとコナンが、

「…怪盗紳士については阿笠博士が知ってたみたいだよ」

「阿笠博士が？」

「うん。実は昨日、阿笠博士の家に行っただけど、そのときに博士が怪盗紳士について教えてくれたんだ。前に新一兄ちゃんが怪盗紳士について教えてくれたんだって」

「新一が？」

「うん」

本当は自分が昨日調べたことだったのだが、さすがに蘭の前で本当のことを話すわけにもいれないからか、コナンはそう言ってごまかした。

「…で、何なの、コナン君？ その怪盗紳士、って」

「うん。何でも警察がかなり前からマークしていた怪盗さんだけけど、盗むものがちょっと変わっているんだって」

「変わっている？」

「うん。宝石とかそういうものは盗まなくて盗んでいるものは殆どが絵なんだけれど、その絵と一緒に絵のモチーフになったものも盗むんだって」

「モチーフ、ってどういうこと？」

「うん。例えばここに大木を描いた絵があるとするとよね。そしたら怪盗紳士はその絵ばかりではなく、描いた大木も一緒に盗むんだって」

「大木を？」

「うん。勿論大木をそのまま盗む、なんてことは出来ないから、その大木の葉を全部刈り取ってその葉を持っていく、といった犯行をするんだって」

「ふーん…」

「それに怪盗紳士も変装の名人だから、なかなか尻尾を掴ませないんだって」

「…じゃあ、今回の事件ももしかしたらその、怪盗紳士がその子を誘拐した、ってことになるわね」

そう言つと蘭は考え込んでしまった。

（…確かに今回の事件、怪盗紳士は絵と一緒にその女生徒を誘拐した、と考えるのが妥当かもしれない。しかし…）

コナンは何か引つかかるものを感じていた。

（…一体何なんだ、この引つかかる感じは？　なんか肝心な所を忘れてる感じがするんだよなあ…。大体怪盗紳士の仕業と考えてもヤツが何でそんなことをしたのかもわからないし、それに、オレ自身、怪盗紳士についてよくわからない部分が多いんだよな…）

そう、いくら昨日優作が残したファイルを調べたとはいえ、それ以上の情報は何も持っていないのである。

（…とにかく、今回の事件についてはまだ何もわからないも一緒なんだ。とにかく一旦事件を怪盗紳士と切り離して考えてみるか）

そう、何か行方不明になるほかの理由はないか、何か最近変わったことがないか、そういう部分も調べないと事件がわからないのではないだろうか？

*

その日の午後のことだった。

探偵事務所兼自宅に戻ってきた蘭はさすがに例の事件に関して気になったことがあったのだろうか、英栄二の個展が開かれているギャラリーに行ってみる、と言い出した。

とはいえ、ああいった事件があった後ということもあつてか、小五郎はさすがに心配になったのであろう、「蘭を一人で行かせるわけには行かない」とコナンとともに3人で行くことにした。

画廊の前に行くとき扉が閉まっていた。「臨時休業」の貼り紙がしてあった。

「…臨時休業か…」

蘭がつぶやく。

「まあ、あんな事件があった直後だからな。臨時休業も当然と言えば当然なのかもしれないが…」

「…そう言えば、画伯はどうしたんだろう？ あれから全然連絡よこさないし…」

「まあ、あいつが事件があった直後だからな。本人もまだ落ち着かないんだろ」

と、そのときだった。

「ホント、残念よね。折角来たのにお休みなんて…」

いつの間にかコナンたちの隣に一人の女性が立っていた。

「あ、確か醍醐さん…、でしたよね？」

蘭が言う。

そう、その女性は例の「スポーツシリーズ」の展示の初日にコナンたちの隣に立っていた醍醐真紀、と名乗った女性だった。

「あら、確かあなたは…」

「毛利蘭です」

「そう、確か蘭さん、だったわね」

「ええ」

「…どうしたの？」

「いえ、その…」

そう言うと蘭は黙り込んでしまった。

「…まあ、とにかくここではなんだから…」

そう言うと醍醐真紀は3人を近くに喫茶店に連れて行った。

*

「それにしてもどうしたのかしらね？ こんな日にお休みだなんて

…」

「いえ、その…」

蘭は一瞬言葉に躊躇してしまった。

「…どうしたの？」

果たして「あのこと」を言っているのかどうかわからなかったのだ。

「…大丈夫、誰にも話さないから。約束するわ」

「…本当ですか？」

「私は昔から約束は破ったことがないのよ」

「それじゃ、誰にも話さないでくださいね」

「…そう、そんなことがあったの」

蘭から話を聞いた醍醐真紀が言う。

「ええ。警察でも関連があるかどうか調べているらしいんですけど…」

「…確かにそんな事件があったとなると、親御さんも心配よね。…」

それにしても、その怪盗紳士は一体何を考えているのかしらね」

「何を考えてる、って…？」

「あ、いや、なんでもないわ。とにかく早く見つかるといいわね」

「それじゃ」

「すみませんなあ、お勘定まで払ってもらって」

「いいんですよ。私も話し相手が欲しかったところだから」

「あの、醍醐さん。例の件ですけど…」

「わかってるわよ。誰にも話さないわ」

そう言うつと喫茶店の前で醍醐真紀と小五郎たちは別れた。

「…それにしても、本当にどうしたんだろうな…」

「そうね。おそらく英画伯も相当ショック受けているはずよ」

「あの醍醐真紀、って女も気にしていたみたいだな」

「そうね。やっぱり美術評論家、って言うのも自分のお気に入りの画家に何かあったら気になるのかしら…」

そんな会話を交わしている小五郎と蘭の隣で、コナンがさっきからずっとなにやら考え込んでいた。

「…コナン君、コナン君？」

蘭がコナンに話しかける。

「ん？ 何？ 蘭ねーちゃん」

「どうしたの？ さっきからずっと考えこんじゃって。そういえば喫茶店を出たときからそんな顔してたわね」

「ん？ な、なんでもないよ」

あわてて取り繕うコナン。

（…なんか気になるんだよなあ…）

そう、コナンはさっきからあの醍醐真紀、と言う女が気になっていたのだ。

（…あの醍醐真紀とか言う女、この間遭った時も今日も、自分のことを美術評論家だと言ってたけど、何だかあの目つき、美術評論家とは思えないんだよなあ。何だか獲物を狙っている動物かなんかのような気がするんだよなあ…）

勿論、なぜそんな気がしたのかはわからない。しかし、コナンにはとても彼女が美術評論家だとは思えなかったのだった。

*

そして、探偵事務所の前に来たときだった。

「お、毛利君、待っておつたぞ」

そう、そこに目暮警部が立っていたのだ。

「目暮警部、一体どうしたんですか？」

「君に話したいことがあって来たのだが…。どこに行ってたのかね？」

「いえ、ちょっと野暮用で…。ここではなんですから、事務所のほうへ」

「わかった」

そして目暮警部を含めた4人は事務所へと上がっていった。

「…それで、例の事件に関しては何か進展があったんですか？」

「いや、これと言って大きな進展はなかったんだが…。そうそう、
そういえば今日、英栄二にも話を聞こうと思って警察に呼んで事情
聴取を行ったんじゃないよ」

「…なんですか？ 英画伯を、ですか？」

小五郎は意外な顔をした。

「ああ。今回の事件に関しては一応彼も関係者の一人だからな」

「それで、何か言っていましたか？」

「いや、これといった手がかりになる話は聞けなかったよ。ただ…
ただ？」

「もうしばらく彼の周りを調べてみよう、と言う結論になっての
「周りを調べる、って…」

「…英栄二は大学時代にパリに留学に行っていたそうだが…」

「その話なら聞いたことがありますよ。なんでも留学に行っていた
2年間の足取りがよくわからないそうではありませんか」

「うん。英栄二についてはいろいろと悪い噂が絶えないことも知っ
ておるよ。捜査員の中には彼が何らかの形で今回の事件にかかわっ
ているのではないか、という者もおつてな。そこでしばらく彼の様
子も見てみよう、ということになったのだが」

「それにしても…」

「…わかっておる。しかしありとあらゆる可能性を考えなければな
らんことは、毛利くんも刑事だった頃にわかっておつただろう」

「まあ、それはそうですか…」

（…どうやら目暮警部たちは怪盗紳士ばかりではなく、英栄二のこ
とも疑っているようだな…）

そんな会話を聞きながらコナンは考えていた。

（…確かに英栄二の周辺についても判らないことが多いからな。そ

う考えると目暮警部の考えも妥当なのかもしれないが…。とにかく、今回の事件はまだわからないことが多いからな。ありとあらゆる可能性を考えなければいけないだろうな…）」

*

そしてその翌日のことだった。

毛利探偵事務所の電話の呼び出し音が鳴る。

「はい、毛利探偵…。あ、目暮警部ですか。今日はどのような御用ですか？」

「どうやら相手は目暮警部のようだった。」

「…なんですと？」

不意に小五郎の顔色が変わった。

何事か、と蘭とコナンも小五郎のほうを見る。

「…はい、はい。わかりました。詳しいことはそちらで伺います。」

「そういうと小五郎は電話を切る。」

「…どうしたの？ お父さん。」

蘭が小五郎に聞く。

「今、目暮警部から連絡があった。昨夜、警視庁に怪盗紳士からの予告状が届いたそうだ。それが…」

「それがどうしたの？」

「詳しいことは警視庁で聞く。とにかく、一緒に来い！」

警視庁。

「…それで、警部殿。怪盗紳士からの予告状というのは？」

「…ああ、どうやらこれのことらしいんだが。」

「そういうと目暮警部は一枚の封筒を差し出した。」

「これが昨日、二課のほうに届けられたらしい。とにかく中を見てみたまえ。」

そして小五郎が封筒の中から一枚の紙を取り出した。

「…これは…！」

「どうしたの？」

ボクの蘭（おんな）に手を出すな

小五郎の脇から紙をのぞきこんだ蘭とコナンも絶句する。
それには、

「英栄二画伯が描かれた『スポーツシリーズ』より『空手』の絵と
モデルとなった少女を戴きに参ります 怪盗紳士」

と書かれてあったのだった。

（第4話に続く）

第4話

「…どう思う、毛利くん？」

目暮警部が小五郎に聞く。

「…これは、間違いなく蘭のことを狙った予告状ですね」

「そんな…、何であたしが…」

蘭がつぶやく。

「…それはわからん。しかし、中森警部に聞いたが怪盗紳士と言うのは狙った獲物は必ず盗み出す怪盗だ、と言っているからな、この予告状もわざわざ中森警部がこちらに回してくれたんだよ」

「となると蘭の周囲も…」

「しかしワシらとしてもやれることに限界があるからな。四六時中蘭君のことを見張っていることなんてとても出来んよ」

「それじゃあ…」

「だから毛利くん、君が頼りなんじゃよ。何とか蘭くんを守ってくれんか？」

「それはわかつてますが…」

「…おっちゃんに任せられるのかよ。せいぜいいないよりはマシ、って程度じゃねえか」

コナンは思った。

「…まあ、とにかくこの予告状は今から科研に回すつもりだ。何か手掛かりがあればいいとは思っとるんだが…」

そついいながら目暮警部は捜査一課の部屋にかかっている時計を見る。

時計は既に午前0時を指そうとしていた。

「…もうこんな時刻か。毛利くん、送ってやるう」

*

それとほぼ同じ頃。

さすがに深夜0時近いと言うこともあってか、昼間はにぎやかな

その通りも、既に閉店している店も多く、道路を走る車も人通りもまばらである。

その中にある交番。中では当直の若い警察官と中年の警察官の二人がいて、雑談を交わしていた。

と、そのとき、一人の少女が交番の中に駆け込んできた。

「…助けてください！」

少女は中に入ってくるなり、警官に哀願する。

「…ちよ、ちよっと、君は？」

二人の警官のうち、彼女に近いほうにいた、若い方の警察官が少女に聞く。

「だから助けてください！」

「一体どうしたんだ。とにかく落ち着いて！」

そういうとその若い警官は少女を椅子に座らせた。

「…君の名前は？」

「水野です。水野祐希です！」

「水野祐希、って…、もしかして、あの誘拐されていた？」

そう警官が聞くと、少女は大きく頷いた。

「…わかった。詳しい話は後で聞くから、君はここにいなさい！」

「とにかく本庁に連絡だ！」

中年の警察官が若い警察官に指示をする。

*

不意に捜査一課の電話のベルが鳴った。

「もしもし。…ああ、目暮だが」

目暮警部が電話を取る。

「…なんじゃと？ わかった。すぐにそっちに行く」

そう言うと目暮警部は電話を切った。

「…どうしたんですか、警部殿？」

小五郎が目暮警部に聞く。

「…いま、交番のほうから連絡があって、行方不明になっった女

子高校生が先ほど保護されたそうだ」

「なんですと？」

「とにかく、今から彼女に話を聞いてみるよ」

「それじゃあ……」

「わかつておる。科研の結果は後で君たちにも教える。それと、君たちを送るように手の空いている警官に頼んでおくよ」

「しかし……」

「とにかく、怪盗紳士がどう出るかわからん限り、こちらも動きようが無いのでな。……心配しないでいい、中森警部にはワシのほうから話しておく。だから君も十分に蘭君の事を注意しておけ」

「……わかりました」

「行くぞ！」

そして目暮警部が捜査一課の部屋を出て行くとはぼ同じくして小五郎たちも捜査一課の部屋を出た。

*

一台のパトカーが交番の前に停車し、中から目暮警部たちが降りてきた。

「……君が水野祐希だな？」

目暮警部が聞く。

「はい」

そういえば確かに事件が起きたときに資料として手渡された写真の少女だったことは間違いないようである。

「それで一体今までどうしていたのかね？」

「その……マンションに閉じ込められていたんです。鍵は外側かかけられていたうえ、他にも鍵をかけていたようで中からは開かなかつたし……」

「それで？」

「でもなぜか今夜だけはかけ忘れたのか、一箇所だけだったんです。それで鍵を開けてここまで逃げ出してきたんです」

「そうか……まあ、とにかく無事でよかったですよ。とにかくまずは親

御さんに連絡をしる。後の話は本庁のほうで聞くからそちらに迎えに来てもらえ」

「了解しました」

そして二人の警官に見送られ彼らを乗せたパトカーはその場を去った。

*

そして警視庁に連れて行き、親が迎えに来るまでの間、目暮警部はもう少し事情を聞くことにした。

数日間閉じ込められていた、と言う割には思っていた以上には元気そうだった。

「どうやら食べ物には困っていないなかったようではある。」

「…それで、君を誘拐した人物が誰なのか、わかるかね？」

目暮警部が聞く。

「それがその…」

水野祐希は何だか言いづらそうだった。

「…どうしたんだね？」

「その…、あたしを誘拐したのって、英画伯だったんです」

「何じゃと？ 英画伯が？」

思わず大声を上げる目暮警部。

「はい」

「それにしてもなぜ、英画伯が…？ とにかく、その君が誘拐されたときの状況を詳しく話してくれんかね？」

「いえ、部活の練習の帰りに、英画伯の乗っていた車が停まって話しかけてきたんです。あたし今、画伯の描かれている『スポーツシリーズ』のモデルをやっていたんです」

「…その話なら知っておるよ。『スポーツシリーズ』に関しては確か画伯は何人かの女子高校生にモデルを頼んでいたようだね」

「そういうこともあって、前々からいろいろと打ち合わせはしたので、今日もそのことについての話かな、って思ったんです」

「…それで？」

「そうしたら突然車に押し込められて…。そうしたら、マンションに連れて行かれて…。部屋の中に電話はないし、携帯電話も取り上げられて連絡を取りようにも取れなかつたんですよ」

「それで画伯は？」

「…時々食べ物を置いていくとすぐにどこかにいなくなってしまうんです。さつきも言ったとおり、鍵をかけていってしまったし…」

「高木くん」

目暮警部は一緒に事情を聞いている高木刑事を呼んだ。

「…なんでしょうか？」

「彼女が閉じ込められてマンションだが…」

「…ええ、調べてみると英栄二が自宅として使っているマンションとは違いますね。まあ、詳しいことは朝になったら管理人に聞いてみますが、もし彼女の言うとおり、英栄二が今回の誘拐事件の犯人だとしたら計画的な犯行の可能性がありますね」

「…ワシもそう思うよ。…ところで」

目暮警部が再び水野祐希のほうを向いた。

「何でしょうか？」

「…ところで君は毛利蘭、と言う子を知っているかね？」

「え、ええ。蘭さんならアトリエで何度も見かけました。確か帝丹の空手部の女の子ですよ？…彼女がどうかしたんですか？」

「…いや、なんでもなし。ちょっと気になったから聞いてみただけじゃよ」

さすがに目暮警部も不安がらせずにはいけないと思っただか、「例の件」については話すのはやめようと思っただのである。

「…警部、彼女のご両親が見えられました」

一人の警官が目暮警部の報告する。

「そうか。…じゃあ、君も早くご両親に元気な姿を見せて安心させてあげなさい」

「…はい」

「それと、股気味に話を聞くことがあるかもしれないが、そのときは協力をお願いするよ」

「はい。今回はどうもありがとうございます」

「いやいや、こちらこそ参考になったよ。…じゃ、高木くん頼むよ」「はい」

そして高木刑事と警察官に付き添われて水野祐希は部屋を出て行った。

*

水野祐希が保護されてから数時間たち、そろそろ夜が明けようか、としていた頃だった。

一人の男がマンションの前までやってきた。

それを合図にしたかのように何人かの警官と刑事が取り囲んだ。

「な、何ですか、あなたたちは？」

「…英栄二だな」

その中の一人の男・高木刑事が英栄二に話しかける。

「…え、ええ」

「未成年者誘拐及び略取の容疑で逮捕する」

それを聞いた英栄二の顔が変わった。

「…先ほどマンションから逃げてきた女子高校生の証言が取れてね。あんたがその子を誘拐した、ということがわかったんだ。詳しい話は本庁で聞く」

「…そうですね、有難うございました」

毛利探偵事務所。目暮警部から連絡を受けた小五郎が電話を切る。

「…どうしたの、お父さん？」

「…英栄二が行方不明になっていた女子高校生を誘拐した容疑で逮捕されたそうさ。ヤツのマンションから行方不明になっていた女子高校生が持っていたのと同じカバンや携帯電話が見つかったことで、本人も自供してるとよ」

「なんですって？ それじゃ……」

「ああ。おそらくあのギャラリーに貼ってあった怪盗紳士名義の紙もあいつが貼ったのだらう、と言うことだ。ただ……」

「行方不明になった女子高校生を誘拐したことは認めているそうだが、例の『蘭を戴く』というあの予告状を出したことは否認しているそうだ」

「……それじゃあ」

「さあな。本当にヤツの仕業なのかどうなのか、調べてみないとわからんだろ」

*

そして翌日。

「新進作家・英栄二 女子高校生誘拐で逮捕」と言う記事が新聞にぎわせた。

そしてその日をきっかけに、それまで謎とされていた英栄二の過去も次々と明らかになって行った。

以前、園子がコナンたちに言っていた「英栄二がパリ留学中の2年間に何をやってたのか」と言うのも全てではないが、いくつかの新事実が明らかになってきたのだ。

まず、英栄二はやはりパリにいた2年間、現地でのある密売組織と付き合いがあったらしいことがわかった。

そのパリの組織は英栄二の絵画の才能に目をつけ、将来的には贋作を描いてそれを売買するために、彼にいろいろな画家の絵を模写させて、将来的には贋作画家に仕立て上げようとしていたが、その組織はパリ市警の手によって関係者が次々と逮捕されてしまったため、行き場を失った英栄二は帰国して、新進画家としてデビューする道を選んだそうである。

また、パリでも婦女暴行容疑などいくつかの問題を起こし、警察に逮捕されたこともあったようだが、結局証拠不十分で釈放になっ

たことがある、と言うこともわかったのだ。

*

英栄二が逮捕された翌日。蘭と園子が並んで道を歩いていた。

「…それにしても英画伯が誘拐をしていたなんて…」

園子が言う。

「…あたしだってそんなこと想像しなかったわよ。でも結局園子が言ったとおりの人だったようね」

「あたしも最初その噂を聞いたときはまさか、と思ったけど。でも結局、火のないところに煙は立たない、っていうことか…」

「…でもどうしてあんなことしたんだろうね」

「…あんなこと、って？」

「ほら、怪盗紳士の…」

「ああ、それね。…おそらく、画伯は全ての罪を怪盗紳士に擦りつけるつもりだったのかもね。おじさんやコナン君が教えてくれたじゃない。怪盗紳士、って絵と一緒にモチーフまで盗む、って。おそらく画伯もその話をどこかで聞いたのよ」

「それであの子を誘拐したのね」

「そういうことね」

「…でも気になるな…」

「…あんたを戴くって言う予告状のこと？」

「うん」

「心配ない、って。きっと画伯がやったことよ。今は否認しているけれど、そのうちに自分がやった、って白状する、って」

「…だといいだけれど…」

蘭は何かまだ心のどこかで引っかかるものを感じていたのだった。

*

「…園子ねーちゃんそんな事言ってたんだ」

毛利探偵事務所。

「うん。あの予告状も園子の言うとおり、画伯の仕業だったらいいんだけど…」

「…いや、事件はまだ終わっていないよ」
コナンがいう。

「終わっていない、って…。どうしてそう思うの？」

「…だって英画伯は被害者の女子高生を誘拐したことは認めただけれど、この間来た予告状については『出した覚えはない』って認めていないんですよ？」

「…それはそうだけど…」

「それに英画伯の住んでいるマンションやアトリエを探しても、その誘拐した女子高校生の荷物は見つかったけれど、それ以外のものは見つかっていない、って言うんでしょ？」

「…うん…」

「それに一度に二人も誘拐なんかしたら真っ先に自分が疑われる、って思うんじゃないかな？」

「…うん、確かにそうよね…」

そのとき、小五郎の机の上の電話の呼び出し音になった。

「…はい、毛利探偵事務所。…あ、目暮警部」

そう、電話の相手は目暮警部からだったのだ。

「はい、はい。…なんですと？ はい、はい。わかりました」

そして小五郎は電話を切った。

「どうしたの？」

蘭が聞く。

「目暮警部からの連絡で、英栄二が自分で作った、と言う怪盗紳士の予告状とこの間送られてきた予告状が違うものらしい、と言うことがわかったんだと」

「何ですって？」

「ああ。念のために科研で調べてみたら、英栄二が自分で作った予告状と、その後の『蘭を戴く』と言う内容の予告状ではどうも違う部分が出てきたらしいんだ」

「…違う部分、って…？」

「いや、指紋とかは検出されなかったし、詳しいことまではわからなかったようだが、使っている紙などに違いが見つかったそうだ」

「…それじゃあ」

「ああ、まだ断定は出来んが、どうやら違う人物が今回の予告状を送りつけてきたらしいな」

（…やっぱりな。今回の事件、なんか英栄二の単独犯行とは思えなかったんだが、どうやら思っていた通りのようだな）

小五郎の話を聞いて、コナンはそう思った。

（…とにかくまだ事件は終わってないねーんだ。ある意味、これから本当の始まりなのかもしれないな）

コナンは握る手に力をこめる。

（…怪盗紳士。絶対に蘭をオメーの好きになんかせねえぞ。どんなことがあると。オレが絶対に蘭を守ってやる）

（第5話に続く）

第5話

阿笠博士の家。

「…ああ、その事件なら話は聞いたよ。まさか画伯がモデルの女の子を誘拐しておったとはなあ…」

英栄二が起こした誘拐事件の顛末を聞いた阿笠博士がコナン「新一」に言う。

「…まあ、なんとなくそんな気はしていたんだけどな」

「そんな気、って、なぜじゃ？」

「怪盗紳士から蘭がモデルになった絵を盗む、と言う予告状が来た、って聞いたときにこれは変だな、っていう気がしたんだよな」

「変な気？」

「考えてみるよ。仮にある家に空き巣に入って成功したからといって、そんなに日も経たないうちにもう一度同じ家に空き巣に入るなんてことはないだろ？」

「…確かにそうじゃな。その家だって今度は入られないように注意するはずじゃし、空き巣に入ったほうとしても1回目より2回目のほうがアシがつきやすいはずじゃからな」

「…だろ？ となるとどちらかの犯行は怪盗紳士を騙ってやった犯行じゃないか、と調べていたんだよな。で、もし最初の事件が本物の怪盗紳士の仕業だとしたら、その日を置かず似たような犯行をするはずがない、と調べてたんだよな。となると怪しいのはあの絵を描いた英栄二、と言うことになるからな」

「それが新一の思ってた『そんな気』というわけか」

「まあな。だから英栄二が逮捕されたとき、それほど驚かなかっただけだな」

「…それにしても、その、怪盗紳士は今回の事件については知っているんじゃないか？」

「多分知ってると思うぜ。画伯が逮捕されてから連日のように例の

事件は報道されているんだ。それに、蘭宛の予告状の事件はまだ解決していない」

「画伯は送った覚えがない、と言っているらしいな。となるともしかしたら…、というわけか」

「ああ。おそらく今度こそ、予告状を送ったのはおそらく本物の怪盗紳士だと思うぜ。画伯の一件で警察もおそらく警備を厳重にしてくるだろう。となると、おそらく2〜3日中には犯行を実行に移す気がするんだ」

「確かにそうかも知れんな。その、怪盗紳士にとっても残された時間はないと言っわけじゃな」

「そういうことだな。…それで博士。ちょっと頼みがあるんだけど…」

「…ちょっと待つのは。いくらなんでもそれは…」

コナンの話を聞いた阿笠博士はさすがに戸惑ってしまった。

「勿論オレだってその位のことは十分に承知してるさ。でも、これ以上怪盗紳士の好きにさせるわけにはいかねーんだよ。今回の事件はオレの目の前で、しかも蘭を狙って起こっている犯行なんだぜ。みすみす蘭を怪盗紳士の手に渡すわけにはいかねーんだよ」

阿笠博士はしばらく考えると、

「…わかった。新一がそこまで言うのならばな。但し、これからやるうとしてしていることはものすごく危険なことなんじゃぞ。くれぐれも気をつけて、蘭くんを泣かせるようなことはするんじゃないぞ」

「…わかってる、って」

*

毛利探偵事務所。電話の呼び出し音が鳴った。

「もしもし」

「あ、蘭君か？」

電話の声は阿笠博士だった。

「あ、博士。どうしたんですか？」

「いや、実はな。2、3日ばかりコナン君をワシのほうで預かりたいんじやが」

「預かりたい、って…」

「まあ、いろいろあってな。大丈夫じゃ、ワシがちゃんと面倒を見る」

「でも…」

「…そういえばコナン君から聞いたが、怪盗紳士のことでももしかして不安なのか？」

「い、いえ。そんなことないですけど…」

「…心配しなくてもいいじやろ。警察も蘭君のことをガードするとか言っているそうじやし、蘭君のすぐそばに名探偵毛利小五郎がおるじやろ。何を心配する必要があるんじや」

「え、ええ。そうですね」

「大丈夫じゃ。蘭君は何も心配する必要はない。それじゃ、コナン君のほうはいいな？」

「…え、ええ。それじゃお願いします」

阿笠博士が電話を切る。

「…やっぱり蘭君も、例のことは気にはしておるようじやな」

そう言って博士はコナンに手短に電話の内容を教える。

「そうか…。でも蘭に余計な心配はさせたくないし、面倒に巻き込またくないしな」

「まあ、とにかく何事もないのが一番いいことなんじやが」

「…とにかく博士、例の件は頼むよ」

「ああ、わかっておる」

*

「都合によりしばらく休業します」と張り紙がしてあるそのギャラリィ。

その近くに一台の車が停車していた。

その中には阿笠博士とコナンがいる。

「…あそこがそのギャラリじゃな」

阿笠博士が言う。

「ああ。画伯が逮捕されたせいで個展は中止。既に撤去作業が始まっているらしいな」

「…しかし、その中からその、怪盗紳士はどうやって絵を盗もうと考えているのじゃ？」

「方法はいくらでもあるさ。作業員に紛れ込んでもいいし、警備員に紛れこんでもいいし、他の方法だっているらでもある。ただ…」

「ただ、何じゃ？」

「…いや、なんでもない」

コナンは何か引つかかるものを感じていたのだった。

そうこうしているうちに夜になった。

昼間停車していたその場所に再び阿笠博士の運転する車が停車した。

中からコナンが降りてくる。

「…それじゃ博士、行ってくる」

「ああ。くれぐれも気をつけるんじゃぞ。もし何か危ない、と思ったらすぐにワシに連絡を寄越すんじゃぞ」

「わかってる、って」

そして車はその場を去っていった。

コナンは昼間見たギャラリーの正面に近づく。

「…さて、どうやって入るか…」

コナンは辺りを見回す。と、裏口のドアが目に入った。

ノブをひねるが当然のことながらドアは開かない。

「…やれやれ。この間、蘭の部屋の前で拾っておいたこれを使うことになるとはな」

そのドアに近づくと、ポケットからヘアピンを取り出した。

まだ今回の事件が起こる前、蘭の部屋の前に落ちていたのを、コナンがたまたま拾っておいて、その内返そう返そうと思っておいて、

今日まで返していなかったのだ。

「…ごめんな、蘭」

そう言うとコナンは鍵穴にヘアピンを差し込む。

しばらくいじっているとガチャリ、と音がし、ドアがすつと開いた。

「ハハハ。何だかピッキング泥棒みてーだな」

そつつぶやきながらコナンはそつと中に入った。

既に日が暮れているとはいえ、外の明かりが差し込んでいることもあってそのギャラリーの中は思ったよりは明るかった。

そして撤去作業も始まったばかりなのか、コナンたちが来たときとほぼ同じような形でそのギャラリーは残っていた。

「…」

コナンはある一枚の絵を見上げる。

「スポーツシリーズ 空手」とタイトルが付けられた例の蘭の絵だった。

「…蘭、絶対お前を守ってやるからな」

コナンはその絵に向かってつぶやいた。

*

それからどのくらい経っただろうか。

そのギャラリーの前に一人の人物が来ていた。

辺りに誰もいないのを確認すると、その人物はドアに手をかける。ところが、ドアは何の抵抗もなく開いてしまった。

その人物は訝しく思いながらも中に入っていた。

ギャラリーの中は英栄二が逮捕されたと言うこともあってか、彼の展示してあった絵の撤去作業をするためか、あちこちで片づけが始まっていた。

「…?」

その人物は中の様子がおかしいのに気がついた。

そう、よく見ると暗闇の中に一人の人物が立っていたのだった。

「…そこにいるのは誰なの？」

するとその人影が、

「…あんたが来るのを待ってたぜ」

そう言うとその人物の前に現れた。

「…君は…」

その人物が絶句する。

そう、その人物はどう見てもまだ幼い少年だったからだ。

「…君は…」

「あんたなら必ずここに来ると思っていた。…おそらくあんたが蘭の絵を狙った張本人だと思っていたからな。どうなんだい、醍醐真紀さん、いや、怪盗紳士さんよ！」

そう言うとその少年　コナン　は持っていた懐中電灯の明かりをその人物に向ける。

そう、その光の先には醍醐真紀の顔が浮かび上がっていたのだ。

「…私が怪盗紳士ですって？　君、冗談はおよしなさい」

「冗談なんかじゃねーよ。…だいたいあんた、何でこんな時間ここにいるんだ？」

「そういう君こそなんでここにいるの？」

「勿論、あんたを捕まえるためだよ。怪盗紳士さんよ」

「…そう、君は私が怪盗紳士だ、って思っているわけね。なぜ、君はそう思うのかしら？」

「…あんたも知っているだろう？　英栄二が怪盗紳士の名を騙ってモデルの女の子を誘拐した、と言う事件を」

「それは知ってるわ。私の名前を騙るなんてとんでもない人物だと思っただけで、まさか英画伯だったとはね…。でもだからといって、怪盗紳士って言う証拠にはならないんじゃないの？」

「勿論、オレだってあんたに初めてあったときはあんたが怪盗紳士だなんて思わなかったさ。でも、あんたと次に会ったときのある言葉が、ちよっと気になってな」

「ある言葉、って？」

「モデルの女子高校生が行方不明になったんじゃないか、と思われていた日、あなたは被害者の女子高校生がkじゃいとう紳士に誘拐されたのではないか、と言った際、オレたちの前でこう言った。『それにしても、その怪盗紳士は一体何を考えているのかしらね』ってね」

「それがどうかしたの？」

「おかしいじゃねえか。何だか自分が思ってもいなかったことがあったような口ぶりじゃないか。それを聞いたときにオレは思ったんだ。もしかしたら今回の事件は本物の怪盗紳士が誘拐したのではないんじゃないか、ってね」

「…だとしても、なぜ私が怪盗紳士だ、って思ったの？」

「『その怪盗紳士は…』って言う言い方に引つかかったんですね。」

まるで自分が本物の怪盗紳士だ、って言うような言い方じゃねーか。それに…」

「それに？」

「…オレの親父はこういつた犯罪のデータを集めるのが趣味でね。その親父のデータを調べてみたらどうやら怪盗紳士は『紳士』と名乗ってはいるが女らしい、って言う情報があるそうじゃねーか。だからもしかしたら…、って思ってたね」

「…そう、そこまでわかっていたの。どうやら君はただのボウヤじゃなかったようね。…その通り、私が怪盗紳士よ。…だとしたら君は、私が何をしに来たのかわかっているわね」

「ああ、勿論さ。でもな、怪盗紳士。お前に絶対この絵は盗ませない」

「盗ませない、って…？」

「ああ。絶対この絵はオレが守ってみせる。お前に指一本触れさせねーぜ」

「…たいした自信ね。どうやってその絵を守ろう、っていつの？」「これを見る」

そう言うとコナンはなにやらスイッチのようなものを取り出した。
「…それは？」

「この絵には発火装置が仕掛けてある。このボタンを押せばあの絵に発火するようになっていいるんだ」

「…なんですか？」

「…いったとおりだよ、あの絵には発火装置が仕掛けてあるんだ」

「…きみ、馬鹿なこと言わないのよ」

「…あんた、もしかしたらオレの言っていることがハツタリだとも思っているんだろ？ 何なら証拠を見せてやろうか？」

「証拠？」

「あれを見る」

そう言うとコナンは床を指差す。

そこには何も描かれていないカンバスが置かれてあった。

「…あれは？」

「…よく見てろ」

そう言うとコナンは別のスイッチを取り出す。

そしてそのスイッチを押した。

すると、あたりに爆発音が響き、カンバスが吹っ飛んだ。

「…！」

「…わかっただろう？ 今のカンバスと同じ爆薬がああ絵に仕掛けであるんだ。…これが何を意味するかわかるだろう？」

「…何を意味する、って…、まさか！」

「ああ。このスイッチを入れれば、あの絵が爆発する。つまりあの絵はこの世から消滅するんだ。つまりどうあがいたってあんたは、この絵を盗むことが出来ねーんだよ」

「…」

「…本当かどうか、試してみるか？」

「…ねえ、君、わかってるの？ もしそのスイッチを君が入れたら…」

「ああ、わかってるさ。オレだって無傷ではいられるはずがない、

つてな。でもな、オレはたとえどんなことがあると、この女を…
蘭を守るつもりでいるんだ。例えそれでオレが命を落とすようなこ
とになったとしても、な」

「…」

「…いいか、怪盗紳士。これだけは言うておくぞ。蘭に…、オレの
蘭に手を出すな！」

「く…」

しばらくの間沈黙が流れた。

やがて、

「…参ったわ、私の負けね。君がそこまであの人を、蘭さんを大切に
思っていたなんて。君がそこまでして蘭さんを守りたかつたなん
てね。今回はその絵を盗むのは諦めるわ。…ねえ、君、最後にひと
つだけ聞かせて。一体君は何者なの？」

「…江戸川コナン、探偵さ」

「コナン君、か。覚えておくわ」

そして怪盗紳士はコナンに背中を向けた。

そして二、三歩歩き出したが、ふと立ち止まると、

「…コナン君」

「何だ？」

「…君なら彼を…、あの、名探偵の孫を超える探偵になれるかもし
れないわね」

そう言うつと怪盗紳士はダッシュしてその場を離れた。

「…待て！ 怪盗紳士！」

コナンが追つて外に出たとき、既に怪盗紳士の姿は見えなくなっ
ていた。

コナンは辺りを見回すが、辺りには誰一人いなかった。

「取り逃がししまったか…。なるほど、アイツが捕まえられねーわ
けど」

コナンはあの男 怪盗紳士の言う「名探偵の孫」 の顔を思
い浮かべながらつぶやいた。

そう、優作のファイルには「あの男」が何度も対決をしていながらあと一步のところを取り逃がしていたこともかかれてあったの思い出したのだ。

そのとき、コナンの背中から

「新一！」

阿笠博士が呼ぶ声が聞こえた。

*

コナンが車に乗り込んだ。

「…どうじゃ？ 蘭君を守ることが出来たのか？」

「ああ、何とか、な」

「そうか。それはよかった」

「…あ、そうだ」

そう言うとコナンはポケットから先ほどのスイッチとなにやら細長い箱、そして先ほどの爆発でぼろぼろになったキャンバスを取り出した。

「…これ、返しておくよ」

「…スイッチは切つてあるな」

「勿論だよ」

そう、コナンが持っていたのは例の小型爆弾とスイッチだったのだ。

阿笠博士はそれを何度も確認し、車の後ろに積んであった工具を使って数分かけて配線を切ると、ようやく走り出した。

「しかしまあ、あんな危険なことをするとは…。あれほどワシが『どうせ怪盗紳士にはわからないのじゃからダミーで十分じゃろ』と言つておつたのに。いくらキャンバスを壊すのが精一杯のごく軽い威力の爆弾だといつても一歩間違えたら大怪我をしておつたところじゃぞ」

「それはわかつてるよ。これが普通の泥棒だったらダミーでも十分

通用しただろうが、相手が怪盗紳士だったからな」

「…そうか、偽物と見破られるかもしれない、と言うわけか」

「ああ」

「まあ、しかし。新一のその、蘭君をどうしても守りたい、と言う気持ちだが、怪盗紳士に勝った、ということじゃ。これで怪盗紳士も絵を盗むのはあきらめるじゃろ」

「…」

しかしコナンが黙ったままなのを見た阿笠博士は、

「…どうした？ 何か心配なのか？」

「何だかこのまま怪盗紳士がおとなく引き下がるとは思えないんだよな」

「思えない、って…。怪盗紳士は負けを認めたんじゃろ？」

「ああ。確かに。でも何だかこのままで終わりそうな気がしないんだよな…」

（エピソードに続く）

エピソード

英栄二の逮捕により個展が中止となり、撤去作業を進めているギャラリーの中。

その中の責任者らしき男がギャラリーの中の職員にいろいろと指示を出している。

と、その部屋の隅でなにやら作業をしている人物を見つけた。

「おい、君、何やってんだ？」

「いえ、別に何も」

「それならさっさと作業を終わらせろ」

*

と、しばらくすると、ギャラリーの前に何台の車が停まった。

そして中から何人かの警官が降りてきた。

「ごめんください」

その声に関係者が近寄った。

「…何の用ですか？」

「われわれは警視庁のものですが」

「警視庁の…？」

「今回の事件に関して英画伯のかかれた絵を証拠品として押収することになりましたね。この通り令状もありますよ」

そういうと一人の刑事が令状を見せる。

「…よろしいですね」

そして刑事たちはてきぱきと作業を進める。

そして警視庁の車がギャラリーを去っていった。

…と、その様子をギャラリーの隅でじっと見つめている人物がいた。周りは気がつかなかったが、その人物の口元がほんの少し笑っていた。

*

学校から帰ってきたコナンは毛利探偵事務所へ続く階段を上がつていき、探偵事務所の上にある小五郎たちの家のドアの前に立った。と、ドアの前には「5時までには帰ってくる。家と事務所の鍵は閉めておくから、帰ったら開けておいてくれ 小五郎」と書かれたメモが貼ってあった。

「…そうか、蘭も部活でまだ帰ってきてないんだ…」

そう呟いたコナンがポケットから合鍵を取り出そうとポケットの中を探っていたときだった。

「…おや？」

そう、ドアの前に何か小包のようなものが置いてあったのだ。

よく見るとその小包は「コナン君へ」とだけ書かれた紙に包まれてあった。

「…一体何だ？」

コナンは首をかしげながら鍵を開け、中に入ってしまった。

コナンは居間に座ると小包の紙を開いた。

「…これは！」

そう、それはなんとあの英栄二が描いた「スポーツシリーズ」の「空手」と題した蘭がモデルの絵だったのだ。

「何でこんなものが…」

と、その絵から封筒が落ちた。

コナンはその封筒を拾い上げると封筒を開き、便箋を取り出した。「…これは…」

その内容を一目見たコナンは驚きを隠せなかった。

「小さな名探偵、江戸川コナン君へ」

なぜこの絵が君のところ届けられたか、驚いているでしょうね。そう、これは私が狙おうとした英画伯が描いた絵で、それがなんと君のところへ来たのか、もしかしたら私が絵を盗んで君に送り届

けたのではないか、と思っっているのかもしれないからね。

心配しなくていいのよ。これは私がある画家に頼んで精巧に作らせた模写なのよ。私が頼んだ画家の腕も相当なもので、私も一瞬どちらが本物の絵か見分けがつかなかったくらいだから。

何でそんなものを私が作らせたか、おそらく察しのいい君ならわかったかもしれない。

そう、私はあの絵を盗んだ後にこの精巧な模写とすり替えておくつもりだったの。そして私はもうひとつの目標、そう、この絵のモデルとなった蘭さんを誘拐するつもりだった…。

なぜ、私は蘭さんを狙ったのか？ 別に蘭さんを誘拐して身代金を奪おう、とかそういうことは考えていなかった。ただ、私の側に置いておきたかっただけだったの。

でも、君のおかげで私の仕事は失敗した。

私が蘭さんを自分のものになりたい、という気持ちより、君の命を賭けてまで蘭さんを思う気持ちのほうが強かった。

そう、私は君の蘭さんを思う気持ちまでは盗むことができなかった。本当に君は小さいのによくやるわね。私は君のその勇氣に感心した。

だから今回、私は負けを認める。私に勝った記念にその絵を君に進呈するわ。

ただ、これだけは覚えておいてちょうだい。

もしまた今度君と会ったとしても、今度はこうはいかない。私だって怪盗紳士としてのプライドがあるもの。

だから君も今回勝ったから次も勝つ、なんて絶対に思わないでほしい。

また会える日を楽しみにしてるわ。

手紙を読み終えた後、コナンはしばらく黙っていた。

「オレだつてたまたま勝つことができただけさ」

そう、彼自身、勝つたとはいえ、怪盗紳士を捕らえることができなかったため、決して喜べはしなかったのだつた。

そして、もし再び相まみえたとき、果たして今度も勝つことができるか、そう考えていたのだ。

「…それにしても、この絵、模写にしてはよく出来てるぜ…」

コナンはその絵をまじまじと眺める。

「…何だか、本当に英栄二が描いたとしか思えねーよな…」

そう、あまり芸術に詳しくはないコナンだが、模写にしてはあまりにもよくできているような気がしたのだ。

と、そのときだつた。

(…まさか！)

コナンは「ある可能性」に気がついた。

「…まさか、そんなバカなことはねーよな。オレの考えすぎだよ」

*

警視庁。

「…英画伯」

留置場に目暮軽侮がやってきた。

「何の用ですか？」

「先ほど、押収した君の絵が警視庁に届けられてきてね。ちょっと君に確認してほしいんじゃない」

そして英栄二が取調室に連れてこられた。

「…とりあえず、ちゃんと全部あるかどうか確認してほしい」

そういつと目暮警部と数人の刑事の立会いの下、英栄二が絵を一枚確認していく。

と、

「これは？」

ある一枚の絵を見た英栄二の目が止まった。

「…？ どうしたのかね？」

目暮警部が聞くが、

「い、いえ。その…、何でもありません」

そして英栄二はもう一度その絵を見る。

（…これは、よく出来ているけど、精巧に出来た模写じゃないか。いったい誰が…？ まさか、本物の怪盗紳士が…。くっ、やられたか！）

おそらくこのことを刑事に話しても信用してくれまい。もし信用したとしても相手はこれまでにも何度も美術品を盗んできた怪盗紳士である。おそらく怪盗紳士が捕らえられ、自分の元に絵が戻ってくる可能性はゼロに近いだろう。

英栄二は怪盗紳士の手際に歯軋りをするだけだった。

*

都内の人目のつかないある場所。

一人の女が椅子に座って物思いにふけていた。

（…あの絵を見てあの子もびっくりしているでしょうね）

そう、女が思っていたのは今回自分が盗もうとして、結局盗むことが出来なかった「あの絵」のことだった。

（まさか彼もあの絵が「本物」だとは思っていないでしょうね。あの子にはそういうことにしておいたし、実際に模写は作ったんだし…。まあ、英栄二だったらあの絵を模写だって見破れるかもしれないいわね。もしかしたら私が盗んだ、って思っているかもしれない）

そう、女はギャラリーの作業員に変装をして作業をしている隙を狙って、英栄二の描いた「あの絵」を精巧に作った模写にすり替え

ておいたのだった。

自分が盗んでコレクションにするためではなかった。今回、自分の前に立ちふさがり、自分の犯行を阻止した「あの少年」に敬意を表して絵を譲り渡すためだったのだ。

正直言っただけ自分のものにも出来なかつた悔しさが無い、と言ったら嘘になる。しかし、自分よりも英栄二よりも「あの少年」のほうが絵を持つのにふさわしいのではないか、そういう考えがあったのだ。そして女の計算が正しければ模写は英栄二の手に、本物は「あの少年」の手に今頃渡っているはずである。

（…でも彼のことだから、もしかしたら自分の持っている絵が「本物」だって思ったかもしれない。そうしたら、彼はどうするかしら？ 警察にでも届けるのかしら？ でもそうしたら、今度こそ私はあの絵を貰いに行くわ。そのときの対決が楽しみね。小さな名探偵、コナン君）

（終わり）

エピソード（後書き）

こんばんは、ともゆきです。

この話を書き始めたのが今年の9月ですから完結まで1年かかってしまったわけですが（^^;、これを書き始めたときはまさか小学館と講談社が手を組んで「コナン」と「金田一」の（傑作選とは言え）期間限定のコラボマガジンを出す、なんて夢にも思いませんでしたね。

まあ、どっちかというところ「金田一」では「地獄の傀儡師」こと高遠遙一のほうが人気あると思うのですが、あえて今回怪盗紳士をコナンの対戦相手に選んだのは、高遠はどっちかというところ怪盗キッドと対決させたい、ということと、実は私は高遠が「金田一」の中で一番大嫌いなキャラで、私が小説でもし高遠を出したら、冗談ではなく最後にヤツを惨殺しかねないので（おい!）、高遠の登場は見送ったわけですが…。

ちなみにコナンは「オレ」と言っているのにタイトルが「ボクの蘭に」となっているのは昔小泉今日子主演の映画で「ボクの女に手を出すな」というのがありまして、（私自身特に彼女のファンというわけではないんですが）今回、そのタイトルを使わせていただいたんですよ（ちなみに「なんてったってアイドル」も彼女のヒット曲のタイトルから）。

私自身が新蘭（コ蘭）派、ということもあるのかもしれませんが（というか灰原はコナンに恋愛感情を抱いたとしても、蘭の幸せを願って自ら身を引くタイプだと思っただよなあ…）、やっぱり蘭が何か危機に陥ったら命を賭けてでもコナン（新一）は蘭を守るのではないか、そんな気がしてこの作品を書いてみたのですが…。

それではまた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7512c/>

ボクの蘭（おんな）に手を出すな

2009年7月3日19時02分発行